
思い出話

なんがー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出話

【Nコード】

N4639B

【作者名】

なんがー

【あらすじ】

旧友に再会して思い出話を語る男。彼の話は、かつて行ったある「仕事」についてのものだった。

やあやあ久しぶりだな……まあ座れ座れ。戦争が終わった直後に会ったつきりだから、10年くらい経ってしまっているか。

いや全く、本当に、俺も君も生きていられて良かったよ。最初に会ったのは大学生の時だったか。……済まん済まん。いろいろあったモンだから、ついつい忘れてしまってたね。

確か我々は大学で支那の……否、今は中国と呼ぶのか。中国の思想を学んでいたんだ。

そして大学を出てからすぐに兵隊に取られたんだった、俺達は。君はその頃に結婚していたっけね。

君は戦争中どこへ？満州か。寒かったろう。

俺はフィリッピンの島へ、ね。初めこそ何とか生き延びてやろうとか思っていたが、戦友は面白いぐらいバタバタと死んでいったよ。さっきまで隣を歩いていた奴が、次の瞬間には敵に頭を撃たれてあの世行きさ。

もつとも、戦死よりも腹を減らしたり病気で死んでいった奴の方が多かった気もするがね。

俺ももちろん腹が減って仕方が無かったよ。食い物が無いから木の根をかじって腹を満たしていた。

日本じゃこんな物を食うのはせいぜい、飢饉うげんの時ぐらいだろう。もちろん俺だつて食べた事は無かったから、初めて食べた時は吐きそうになったよ。

だけれども悲しいことに、そんな粗末な物を食っていても腹に入れば結局は同じと言うか、腹が膨れてしばらくは空腹を感じなくて

済んだものだから何とも悲しいものだよ。

そんな中でも何とか生き残った俺は、同じく生き残った奴らと、戦争が終わってから船に揺られて復員してきたんだ。

空腹のあまり、眠る時には美味しい物を腹いっぱい食べる夢ばかり見ていたっけ……。

何？こっちはとにかく寒かった記憶しかないって？ハハハ。それはそうだろう。何せ、開拓に行った連中が、「地面が凍ってて田畑を耕せなかった」って話だからな。

しかし、今や戦争も終わって、幸いココには暖房も暖かい食べ物
の沢山あるからゆっくりするといい。

いや、この店は決して俺の家ではないけどね。ハハハハ……。

イヤイヤ、ハハハ、自分から話を振っておいてなんだが、もうこんな辛気臭い話はやめようぜ。戦争は終わって平和の時代だ。あの頃とは違っただから、もっと面白い話に花を咲かせよう。

確か、最後に君と会ったのは復員の船から降りた港だったなあ。
あの時はお互い相手は名誉の戦死を遂げたものだとはかり思い込んでいたものだから、互いの顔を見合わせてポケットとじていたっけ。
それで君はすぐに破願して、僕はハラハラと涙を流して、互いの生還を抱き合って喜んだ。周りにも人が沢山いたのにね。今となつては少し恥ずかしいが、当時はホントウに心から嬉しかったもんだ。

ほう、そうか。君はすぐに故郷へ帰って家族の元へ行ったのか。

ウン、君の綺麗な奥さんも喜んだだろう。オイオイ照れるなよ。本
当の事を言ったまてだよ。

え？俺？いいや、いまだにそんな話は無いな……。寂しいものさ。

お、俺は何をしていたかって？その……。それが、ちょっと大きい
声では言えないような話なんだが……。

どうしよう……。話すべきか話さざるべきか……。

……………。

よし、君を俺の友人と見込んで……話してしまおうか。どうかこ
の話を聞いても、俺を軽蔑したりはしないでくれよ？

俺は君と別れた後、すぐに東京にある家族の元へ向かったんだ。
だが、我が家は影も形も無かった。家族も居なかった。きつと皆、
空襲にやられたんだ。

そりゃあひどく悲しんだよ。しかし悲しんでばかりもいられない。
何とか食い扶持を探さなければならなかったからね。

俺は食うためにあらゆる仕事をやってきたつもりだった。法律ス
レスレの仕事をし、お巡りさんのお世話になるかならぬかという
スリルを味わったことも度々だ。

しばらくそんな生活を続けていたが、やはり生活は苦しい。その
当時はみんながみんな苦しかったようだが、俺には周囲の人間を気

に掛けている程の余裕は無かった。自分の事で精一杯だったんだよ。

その内、俺に不思議な儲け話が飛び込んできた事があった。汚い身なりをした俺がどこかの食堂に入って飯を食べていたときに、店の中に居た一人の紳士が声を掛けてきたんだ。

店の中にいた連中はみな目糞鼻糞の汚い格好をしていたと思うが、その紳士だけはどこから用意したものか、とても整った格好をして、上等な服に身を包んでいた。

さっきの「儲け話」というのを俺に持ち込んだのがこの紳士だったんだが、「ちよつと簡単な仕事をしてくれれば大金が手に入る」と言う。

そしてその仕事の内容がこの話の決定的にへんな部分なんだが、何でも、「毎日決まった時間に手紙を受け取って、決まった場所に持っていくだけでいい」ときたもんだ。

……ああ、そんな怖い顔で見ないでくれ。もちろん俺だって、最初は怪しいと思ったから断ろうとしたよ。

だけれども紳士の言う報酬の額があまりにも魅力的だったものでね……。結局最後はその手紙運搬の仕事を受けて、3日後から働くことになったんだ。

待ち合わせの場所は例の紳士に会った食堂だった。俺はそこで封筒に入った手紙を受け取ってから、指示された町外れの工場に向かうことになった。

時間は……確か夕暮れ時だったと記憶しているな。俺は夕闇に体

を紛れさせながら、約束の場所へ向かっていった。

工場の周りは人っ子一人居る気配が無かったけれど、空襲か何かで壊れたようで、壁や天井に大穴が開いて完全な廃墟と化していたが、よく目を凝らして見ると、どうやらその壊れた建物の中に人影があるようだったから、俺がもしやと思って近付くと

「新しく入った仕事の方ですか」

と聞かれたもんだ。

どうやらその人……確か中年の男だったみたいだが、彼は俺を雇った紳士の知り合いで、俺が手紙を渡すべき人物だったんだ。

俺はペコペコと頭を下げながら預かっていた手紙を渡して、適当な挨拶をしてその場からサッサと立ち去ってしまった。「これで大金が手に入るなんて、そんなうまい話が本当にあるものか」と思いつつ……。

翌日に例の食堂で紳士と会った俺は、報酬が入った紙袋を貰った。信じられないことだが、袋一杯の札束だった。とても信じられなかったさ。と言うか、今でも信じかねるのだけれどね。

それで味を占めた俺は毎日毎日紳士から渡される手紙を運搬していたんだが、その内に、この手紙の内容がドンドンと気になりだしてしまったんだ。かと言って勝手に封筒を開けて中身を盗み見るのも気が引けたから、俺は自分の手の中に在る手紙の内容はとうとう知らずにそのまま運搬役を続けていた。

それで俺はある時に気付いたんだが、紳士の知り合いの男が待っている工場と言うのは、時々若い女や少女やら少年やらが連れてこ

られていたんだよ。

それについて男に訊いてみる勇氣は俺には無かったが、きつと紳士とその知り合いの男は女衞せけんで、その工場は売春を斡旋あっせんしているんじゃないかしら……とその時は思っていた。

建物の中には何だか肉が沢山あったようだから、きつと連れて来られた連中はあれを食べて精をつけさせられるんだろつなあ、と想像していた。

そして俺が運ばされている手紙は「　という女を連れて来い」というような文言が記されているんじゃないかと……。

それで俺は、「きつと自分は売春の手伝いをさせられているのだな」というようなことを思っていた。少し後ろめたい気持ちも無いではなかったが、結局はその後も手紙の運搬の仕事を続けていた。今思えば、この時に足を洗っているべきだったかもしれないと思うけれどね。

俺が手紙運搬の仕事を始めてからしばらく経ったある時、例の紳士は「今日の仕事であなたを雇うのは終了です」と言い出した。

俺は今までの仕事で随分と金が貯まっていたから、特に反感を感じることもなく最後の仕事へ出かけていったんだ。

だけれども工場の近くまで歩いてきたところで、手紙の内容が猛烈に気になりだしてしまっただよ。一度は我慢した衝動だったが、「今日で最後なんだから覗いてしまえ、どうせ売春の話だろう」という思いに後押しされてしまった。

封筒を開けて、中に入った手紙を読んでみたら……その……今思

い出しても怖ろしいんだが……こんな事が書いていやがったんだ。

『コノトコロ、売春ニ対スル当局ノ取り締マリガ厳シクナツテキタノデ、新シイ食料品ヲ確保スルノガ困難トナツテ参リマシタ。』

我々ノ仕事ハ売春ヲ装ツタモノでアルタメ、コノママノ状態デ商売ヲ続ケテイレバ、我々二人トモ遠カラズ牢獄行キニナルノハ確實デシヨウ。

我々ノ提供スル人間ノ肉ハ非常ナ好評ヲ頂イテイルダケニ、残念デナリマセン。

ツキマシテハ、平素手紙ヲ運搬シテクレテイル青年ヲ最後ノ肉トシテアナタ様に譲渡シタク存ジマス』

……情けないけれども、俺は怖ろしくなつてその場でガタガタと震えだしてしまった。あの紳士と男は女術なんかじゃなくつて、人肉を売りさばいている商売人だったんだよ。

工場に集められている連中は哀れにもあの二人組に殺されるためにやって来た連中で、建物の中に置いてあつた肉はそいつらの成れの果ての姿だったに違いないんだ。

あの建物は人間の屠殺場とほころだったんだよ。

俺は二人組の連続殺人行為に知らず知らずのうちに加担していたと知って愕然とした。

そして商売が出来なくなる前の最後の商品として売られようとし

ていたのが俺自身だったというわけさ……。

俺は幾分落ち着いてからどうしようかと思ってその場に立ち尽くしていたが、何だか工場の中から女の「キヤアア」とかいう悲鳴が聞こえてきた。

怖々覗きに行ってみれば……。

あ、あの男が包丁を手にして若い女の体を解体しているじゃないか……。まず頭を切つて、次に腕を、次に足を……。といった具合にドンドンと骨から肉がそぎ落とされて、店なんかに並んでいる売り物のような塊になっていった。

さすがに手馴れているのか、男の持つ包丁はスルスルと女の肉を行ったり来たりしていたな。

そのうちに男は邪魔になった女の頭を、その辺にゴロリと転がした。その頭は球^{ボール}みたい^にに転がって俺の近くにやって来た……。

転がる頭が止まった瞬間、とてもこの世の物とは思えない怖ろしい断末魔の目と、俺の目がピタリと合ってしまった。

俺はいよいよ極限まで怖ろしくなつて、「ギヤアア」と大声を上げて一目散に駆け出してしまった。俺が居たことに気が付いた男が何やら叫びながら追いかけて来たようだったけれど、そんなことは構うもんか。

俺は手紙と封筒をシツカリと握り締めたまんま、ひたすら人の居る方へ、街のある方へ、警察の元へと走り続けた。日本に帰って来てからあんなに走つたのは初めてだったよ。戦争で敵に追いかける

れて、ジャングルの中を逃げ回った時以来だったな。

気が付いたら男は居なくなっていた。ジャングルの悪路で走りを鍛えた甲斐があったってものさ。ハハハ……。

それで俺は警察を見つけて自分が見たものを正直に言ったんだが、初めは信じてもらえずに苦労したよ。

何日かの取調べをした後、警察はいくらか俺の言うことを調べてみる気になったらしくて、それで俺は握り締めていた手紙を証拠品として提出して、例の工場に沢山放置されていた肉や死体を見せた。

そこで警察も、この一件が戦争帰りの男の与太ではなく、やつとの事で陰惨にして無情なる恐るべき猟奇事件と判断してくれたのさ。

その後で本格的な捜査が始まったんだがどうにも不思議なもので、あの紳士も、その仲間の男も、どこかに行方をくらまして一向に捕まらなかった。もちろん事件は迷宮入りだよ。

……何だいその顔は。ハハア、さては信じていないな。だがこの話はれっきとした事実なんだよ。この身で以って体験したんだからね。

事件後に、事件の当事者として何とか言う雑誌の取材も受けたんだよ。完成品の見本を受け取ったんだが確か……

『廃工場で行われる怪紳士一味の残虐非道なる行い！関係者の一青年への本誌独占取材！』

とかいう見出しだったな。その雑誌の創刊号で一番の目玉記事だったんだが、次の次の号で廃刊になってしまったそうだな。

だから「証拠を見せる」と言われても少々困るな……。

まあ、何年も前の話だよ。信じる信じないは君の自由だけれど。

とにかく、いつまでもこんな話ばかりしていても仕方が無いさ。さあ、俺達二人の再会を祝して乾杯といこう。

……乾杯！ハハハハハ……。

……。

ふう。ところで、最近知り合いから面白い仕事を紹介されたんだが、君、やってみる気は無いか？

とても簡単な労働でかなりの高給だそうだよ。

何でも、××病院の地下に保管されている、解剖用の保存液ホルマリン漬の死体を管理する仕事らしいんだが。

(後書き)

都市伝説を元に書いてみましたが、全然怖くない上によく分からん話になってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4639b/>

思い出話

2010年12月16日02時59分発行